

<学術論文>

日中の装丁形式における構造の歴史的変遷と 文化受容に関する考察

—— 唐・宋、平安・鎌倉時代の装丁形式を中心に ——

閔 夢真

東亜大学 総合学術研究科 デザイン専攻 文芸瑛研究室
yanmengzhen842@gmail.com

《要 旨》

唐・宋、平安・鎌倉時代はいずれも装丁技術上の転換期にあたり、加えて相互の文化交流が活発な時代でもあった。唐末から宋代にかけて、中国では装丁が巻物形式から冊子形式へ移行しており、この時期には、折本（経折装）・旋風装などの装丁形式が生み出された。一方、日本においては、中国から伝来した装丁形式を基盤に、相同的な構造を持つ多様な変化が生じ、後期には粘葉装・列帖装など、日本的受容のもとで発達した独自の装丁形式が成立した。こうした差異は、単なる構造上の違いにとどまらず、背景とする宗教観念、読書文化、その時代の文化など、多様な要因と結びつくことで生じてきていることが想定される。

本テーマに関する従来の研究は、日中いずれか一国の視点から論じられる場合が多く、構造的特徴や文化的象徴性を横断的に比較・分析した研究は限られている。本論では、こうした状況を踏まえ、唐宋期・平安鎌倉期における中国と日本の代表的な装丁形式である「旋風装」と「折本」を主要な対象とし、その形成および受容のプロセスや構造的変容について比較検討する。また、事例分析および量的データの整理を通じて、両形式に内在する文化的象徴性と造形的価値を明らかにする。

キーワード：旋風装、折本（経折装）、歴史的装丁、唐・宋時代、平安・鎌倉時代、文化受容、日中比較文化研究

《目 次》

1. 本研究の目的
2. 先行研究の分析
 - 2.1 歴史的装丁形式に関する研究
 - 2.2 旋風装および折本（経折装）に関する研究
 - 2.3 まとめ
3. 歴史的装丁形式の展開と折本（経折装）・旋風装の形成
 - 3.1 日本における装丁形式の起源と展開
 - 3.2 中国における装丁形式の起源と展開
 - 3.3 旋風装と折本（経折装）の形成と分析
4. 旋風装と折本（経折装）の分析：『刊謬補缺切韻』と『法華経』を中心に
 - 4.1 旋風装の分析：『刊謬補缺切韻』を中心に
 - 4.2 折本（経折装）の分析：『法華経』を中心に

5. 装丁構造と文化的受容の考察
 - 5.1 旋風装の文化受容の考察
 - 5.2 折本（経折装）の文化受容の考察
 - 5.3 日中の比較と文化的受容
6. 結論と今後の課題

1. 本研究の目的

装丁は、文字と物質形態を結びつける重要なメディアであり、単なる読書のための機能的装置ではなく、その時代の技術体系、宗教観、文化などをも反映するものである。中国の唐代（618年-907年）から宋代（960年-1279年）にかけての時代は、書籍の装丁形式が巻物形式から冊子形式へと移行するという意味で装丁技術上の重要な変革期であった。実際、4世紀から11世紀にかけて制作された古写本として知られる「敦煌遺書⁽¹⁾」においても、そのことを裏付ける宋代冊子形式の原型や折衷形式が確認されている。

この変革期に相当するのが、日本の平安（794年-1185年）・鎌倉（1185年-1333年）時代である。その間、両国間の文化交流が深まるなかで、日本には中国から卷子装などの装丁形式を有する典籍ももたらされた。日本では、こうした中国伝来の装丁形式を基盤とし、後に列帖装（綴葉装）・大和綴⁽²⁾など、独自の構造的・美的特徴を備えた装丁形式が成立することになる。

中国書誌学の研究者であり、古典籍保存家でもある李致忠は、唐・宋代の技術革新を指して「この時期における書籍形式の変化は、中国の装丁技術の発展を示すだけでなく、思想や信仰体系の変化の産物でもある」（李 2008, p.3）⁽³⁾と述べている。もしそうであるならば、中国と日本でそれぞれ同じ名称と呼ばれ、形式上の基本的な枠組みを共有しながらも細部の構造や受容された文化的背景に関して相違が認められる装丁形式が存在する場合、それらの差異に着目し異同を明らかにすることは、両国における装丁形式の歴史的変遷と展開をより正確に把握する上で不可欠である。

そこで本研究では、唐宋時代の中国と平安・鎌倉時代の日本に着目し、巻物形式から冊子形式へと移行する過渡期における代表的な装丁形式である「旋風装（せんふうそう）」と「折本（おりほん）（経折装）」について、両形式の構造的特徴と造形理念の異同を明らかにし、それらの歴史的装丁形式が異なる社会的背景、宗教儀礼、読書文化のもとでいかに受容・再創造されたかについて考察する。また、巻軸装から冊頁装への発展過程を明確にし、両形式に内在する文化的象徴性と造形的価値を解明する。その際、本稿では、中国に現存する旋風装の代表例である『刊謬補缺切韻⁽⁴⁾』（旋風装）および日中両地域に伝存する『妙法蓮華経』（以下『法華経』）⁽⁵⁾折本（経折装）を中心的資料として取り上げ、文献考証・図像分析・実物比較を基盤としながら、書籍の寸法比率、装丁技法などを量的に整理・分析する。

なお、本稿で触れられる「旋風装」についてあらかじめ若干断っておきたいことがある。確かに日中いずれの場合にも同様に「旋風」という語が用いられてはいるものの、それぞれが指し示す形には幾分差異が認められる。まず、中国書誌学において「旋風装（別称・龍鱗装／竜鱗装／旋風葉装⁽⁶⁾）」とは、卷子装の外形を保ちながら、内部に単葉の料紙を一葉ずつ位置をずらして貼り付けることによって構成される装丁形式を指す。それに対して、日本書誌学において「旋風装（別称・旋風葉）」は、折本の前後の表紙と背の部分を連続させ、本紙を背から包むようにした装丁形式を意味する。そこで本稿では、必要に応じて、中国の文脈においては「旋風装（龍鱗装）」、日本の文脈においては「旋風装（旋風葉）」と表記し、両者を区別した上で、その異同について検討する。

ここで、「折本（経折装）」とは、紙を横方向に貼り継ぎ、山折り・谷折りを繰り返して蛇腹

状に折り畳むことによって成立する装丁形式を指す。日本では一般に「折本⁽⁷⁾」と呼ばれ、中国では主として「経折装（折本）⁽⁸⁾」と称される。ただし、具体的な用途・寸法・製作技法には地域差および時代差が認められるため、本稿では必要に応じて両者を区別しつつ、「折本（経折装）」と併記する。

2. 先行研究の分析

本節では、本研究の目的に鑑み、当該テーマに関する先行研究を二つの領域に整理して分析する。すなわち、①旋風装・折本（経折装）を含む日中歴史的装丁史および書誌学に関する研究、②旋風装・折本（経折装）に関する個別的研究である。それを通して、本研究の意義や位置付けを明確にする。

2.1 歴史的装丁形式に関する研究

歴史的装丁形式の研究は本来、書誌学・文献学・版本学といった学術分野において展開されてきた。初期の研究では、古典籍の版本の系譜、書体の特徴、装丁方法など、技術的な側面に焦点が当てられていた。20世紀後半以降、旋風装・折本（経折装）を含む装丁形式や用紙・製本・保存の実践に関する研究が学術領域として体系化され、書物の外形構造や装丁形式、流通過程が歴史的・文化的文脈の中で分析されるようになった。

2.1.1 中国における歴史的装丁形式の研究

中国国内においては、歴史的装丁の発展や構造分析などに関する研究が比較的豊富に蓄積さ

れている。「中国伝統書籍装丁」や「古代装丁」などのキーワードを用いてインターネット上で検索すると、関連文献の数は年々増加しており（図1）、歴史的装丁研究が持続的な上昇傾向にあることが確認される。これらの中で、「歴史的装丁」「装丁芸術」といった総論的研究に加え、特定の装丁形式を対象とする研究の中で最も多く論じられているのが旋風装および折本（経折装）である（図2）。このことは、旋風装および折本（経折装）が、歴史的装丁形式の研究において重要な位置を占めていることを、あらためて示している。

この中で本研究と関連性の高い研究論文としては、『装丁』から『デザイン』へ—中国古書の装丁における伝統的な美学思想と現代的な意味（李根蔓 2024）があり、研究書としては『中国書籍装丁四千年芸術史』（楊永徳・蔣潔 2013）、『歴代書籍装丁芸術』（李明君 2009）、『中国古代書籍史』（李致忠 2003）などが挙げられる。

まず、美学者である李根蔓は、上記の論考において、折本（経折装）を伝統美学思想と技法が融合した総合芸術として位置づけるとともに、儒教・道教を基盤とする美学思想が、書籍の制作や使用における美意識や感受性に影響を与えたと論じている（李 2024, p.64）。とりわけ、書籍装丁を人と物との相互作用の中で捉え、読書における姿勢や書写行為の変容と書籍形式との関係に言及している点は注目に値する（同書, p.65）。

しかしながら、本論にとって有益な文化的・美学的な視座が提示される一方で、具体的な事例に即しての分析には限りがあり、とりわけ読

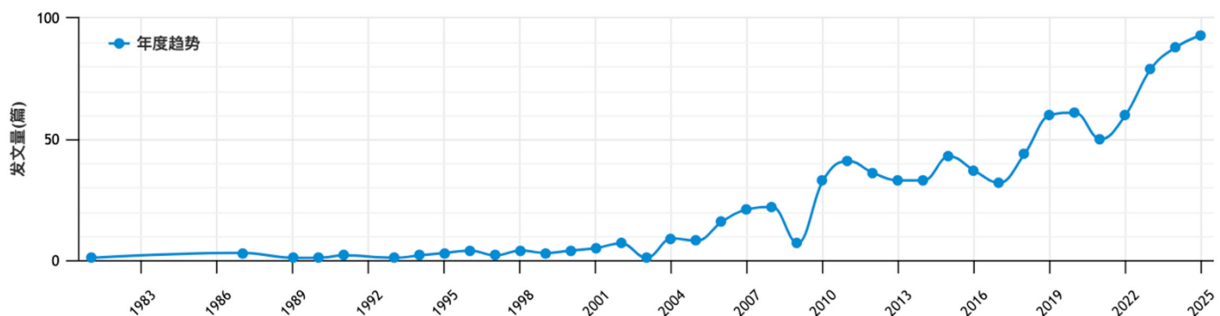


図1 歴史的装丁に関する論文の全体的傾向分析

中国知網（CNKI：中国科学院文献情報センターが運営する学術データベース）より引用（2025.10.1）。

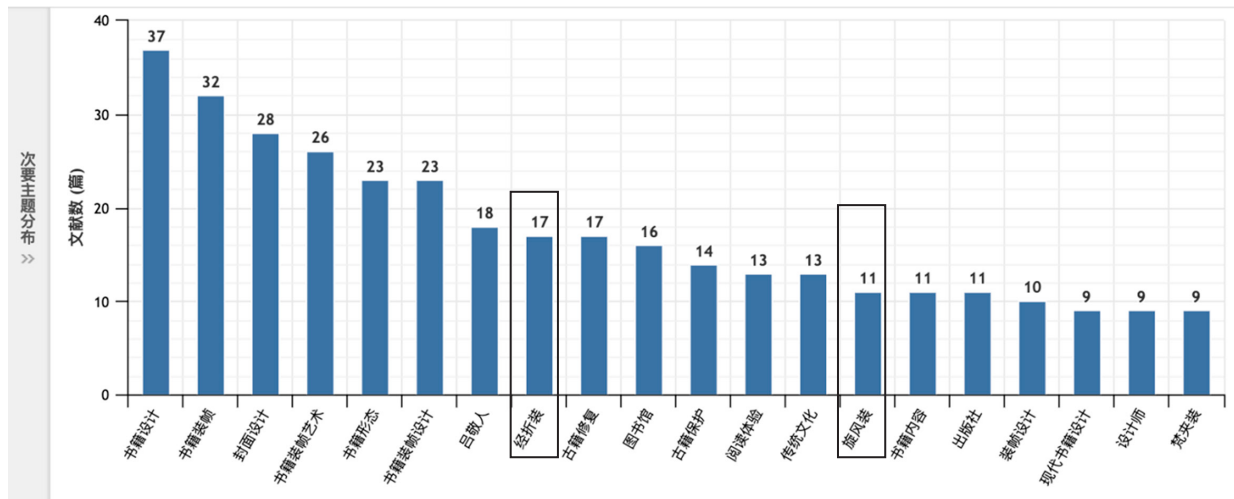


図2 歴史的装丁に関する主題要素の分析

中国知網 (CNKI: 中国科学院文献情報センターが運営する学術データベース) より引用 (2025.10.1)。

書形式や書籍用途の変容, ならびに仏教經典や韻書などの文化的背景および用途・機能的要請が旋風装 (龍鱗装) や折本の成立および発展にいかにより具体的な影響を及ぼしたのかについては, なお十分には明らかにされていない。

次に, 楊永徳・蔣潔による『中国書籍装丁四千年藝術史』(2013) は, 書籍の形態を「初期形態—正規形態—冊子形態」の三段階として整理し, その発展過程を示した点に特徴がある。その際, 「旋風装 (龍鱗装)」を巻物形式と冊子形式の中間に位置する過渡的な装丁形式として位置付ける (楊・蔣 2013, p.50) 一方, それが巻物形式の保存性と冊子形式の可読性を併せ持つものであったとし, その代表的な例として唐代の『刊謬補缺切韻』を挙げている (同書, p.50)。さらに, 経折装を仏教經典の正統的装丁として位置づけてもいる (同書, p.57)。

ここで, 『刊謬補缺切韻』という具体例の提示は, 旋風装 (龍鱗装) の成立過程やその背景要因を検討するうえで, 重要な手がかりを与えるものとして評価できる。また, 経折装を仏教經典の正統的装丁として位置づけている点は, 折本 (経折装) が特定の宗教的文脈の中でどのように受容され, 定着していったのかを理解する上で, 有益な示唆を与えるものである。しかしながら, 上記の研究において挙げられている仏教經典を中心とする折本 (経折装) の諸例については, その構造的特徴や造形上の共通性を

含め, なお検討の余地が残されている。さらに, 旋風装については外観上の特徴や機能に関する説明はなされているものの, 具体的な構造や製作工程に踏み込んだ検討は, なお限定的である。

これに対して, 潘美娣による『古籍修復と装丁 (増補版)』(2013) は, 理論的枠組みの構築よりも, 古籍修復の現場における実際の製作技術やコストの問題に着目した研究である。とりわけ, 敦煌文献に見られる經典類の修復事例を通じて, 経折装や旋風装 (龍鱗装) に用いられる具体的な道具や工程を詳細に示し, 装丁を構成する構造要素を把握することの重要性を明らかにしている。これらの具体的な修復事例の提示は, 旋風装および折本 (経折装) の構造を実証的に把握するための基礎的資料を提供しており, 本研究における装丁構造の分析にとって重要な参考となる。これに対して, 本書の関心は主として修復実務の方法論に置かれており, 折本 (経折装) や旋風装の形成過程や構造の背景, さらには装丁形式の差異を生み出した社会的・文化的要因についての理論的・歴史的検討は, 必ずしも中心的な課題とはされていない。

以上のように, 中国における歴史的装丁形式の研究は, 装丁形式の位置づけや外観上の特徴, 機能的な特徴の整理に重点が置かれており, 具体的な古籍資料に即した構造的分析や, 造形理念を社会的・文化的背景と結びつけて検

討する視点については、十分とはいえない。とりわけ、旋風装および折本（経折装）に関しては、構成や製作の在り方に踏み込んだ検討が限定的であり、形式の成立過程や意味生成の側面については検討の余地が残されている。そこで本研究では、こうした先行研究の成果を踏まえつつ、旋風装および折本（経折装）に関する具体的な古籍を対象として、その構成や装丁の在り方を検討し、構造および造形理念の観点から、より詳細な分析を行う。

2.1.2 日本における歴史的装丁形式の研究

近年、日本においても、旋風装・折本を含む歴史的装丁に関する研究は着実に蓄積されつつある。とりわけ重要な研究として、たとえば、吉野敏武の論文「古文書古典籍の装丁形態と料紙及び修補作業」（2008）、書誌学者・堀川貴司による『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』（2010）、佐々木孝浩『日本古典書誌学論』（2016）などが挙げられる。これらの研究では、旋風装・折本が図版とともに整理されており、書誌学的観点から旋風装・折本を含む古典籍の形式や用語が論じられている。その一方で、主として書誌学的整理に重点が置かれることで、個別の装丁形式に即した構造分析や造形理念の分析については、なお検討の余地を残している。佐々木自身、装丁の格式や本文の種類との関係、改装の様態などといったテーマがこれまで、十分に顧みられてこなかったことを指摘している（佐々木 2016, p.28）。では、以下に、上記の研究に立って検討してみたい。

まず、吉野敏武の論文「古文書古典籍の装丁形態と料紙及び修補作業」（2008）は、宮内庁書陵部での修補実践を踏まえ、卷子本・（折本）経折装・粘葉装⁽⁹⁾といった多様な装丁形式を実証的に分析したものである。折本の具体例として挙げられる『法華経』如来寿量品第十六などに関して、料紙の加工技術と装丁構造との関係を明確に示した点は、実践的研究として大きな意義を有している。その反面、分析の焦点は技術的側面に置かれており、造形的意図や文化的文脈に関する考察は限定的である。

佐々木孝浩の『日本古典書誌学論』（2016）

によれば、日本における書物文化は、漢字の故郷である中国の影響を強く受け継いでいる（佐々木 2016, p.8）。つまり、日本の古典書籍の装丁形式や書物に関する観念は、中国の書物の形式を摂取したうえで独自に展開した成果であるという。佐々木は、その上で、装丁形式とそこに収められる作品の内容との相関関係を重視し、さらに書物形態が作品に影響を及ぼしうる可能性についても論じている（同書, p.28）。加えて、日本において13世紀以降折本が圧倒的に多くなり、古い卷子装の写経が折本に改装される事例を挙げ、折本が宗教的实践に適した機能性をもつ装丁として受容されたことを述べている（同書, p.12）。もっとも、佐々木の議論は、主として日本国内における装丁分類とその使用傾向の分析に基づくものであり、折本（経折装）の具体的な構造分析や、実際に装丁が作品内容にどのような影響を及ぼしたのかについては十分に示していない。旋風装との構造比較や受容関係についても直接的には論じられておらず、本研究で扱う両形式の比較検討に関しては、さらなる補足が必要である。

2.2 旋風装および折本（経折装）に関する研究

歴史的装丁一般だけでなく、旋風装および折本（経折装）に関する個別研究も増えてきている。その中では、高田時雄の「旋風装は日本に行われたか」（2003）や李珂の「経折装写本装丁修復研究と実践—〈五月五日午時書四海竜王進宝味〉を例として—」（2023）、さらには杜偉生の「敦煌遺書の装丁から見た『旋風装』」（1997）、方俊琦の「古籍における『旋風装』の変遷探微」（2009）などが特に注目に値する。以下、それぞれについて吟味してみたい。

高田時雄の論考は、東アジア書籍史および装丁文化の伝播を視野に入れ、中国における「旋風装」の起源・構造・受容を検討している点で有益である。高田は、旋風装を「巻軸装の外観を保持しつつ、右から左へ折り畳む構造をもつ中間的形式」と位置づけている（高田 2003, p.2）。同時に、日本において当該形式の実例は確認されていないものの、江戸期の国学者・屋

代弘賢や、明治から大正期にかけて活動した書誌学者・島田翰らが、文献に基づき、旋風装に類似する装丁形式について言及している（高田 2003, p.3）。そこでは、旋風装の葉は、前後の表紙部分のみを貼り合わせ、中間の書葉は糊付けされていないため、すべての葉を展開すると風にはためくような状態を呈する装丁であると説明しているという（前掲論文, p.2）。さらに、高田は、中国における書物の装丁形式が巻軸装から冊子へと移行する、まさにその過渡期に、奈良・平安期の日本人留学生や僧侶が唐に渡り、現地でそれらの書物に接していたという歴史的状況にも着目している。もっとも、高田の研究は主として文献記述と形式的把握に基づくものであり、旋風装の具体的な構造分析や造形的比較、さらには文化的受容の差異に踏み込んだ検討については、今後の課題として残されている。

次に、李珂の論文は、古籍が本来もつ外観や風合いを可能な限り保持しつつ、実際に使用できる書物としての機能を高めるべく行われた修復の実例を示したものである。そこでは、経折装の起源や基本的な構造の特性、ならびに仏典を中心とする古典籍の装丁形式が歴史的に整理されており、折本（経折装）を理解するための基礎的な資料が提供されている点で有益である。一方で、その分析は主として形式や機能の説明に重点が置かれており、従来の文献中心の経折装研究を実務的・技術的次元における研究で補った点は評価されるものであるが、造形構造や文化的象徴性の分析については限定的であり、比較検討も行われていない。

杜偉生の研究は、英仏両国に所蔵される敦煌遺書の調査に基づいたものである。その中で杜は、蝶装⁽¹⁰⁾および折本（経折装）は旋風装として位置づけるべきではないと論じ（杜 1997, p.182）、古典籍に見られる旋風装に関する記述を整理・検討している。その議論は、いわゆる「旋風装」を蝶装や折本（経折装）と区別して捉える視点を提示しており（前掲論文, p.188）、本研究の分析に対して重要な示唆を与えるものである。しかしながら、同研究においては、旋風装の構成頁を指す用語である「旋風

葉」や「葉子」が、もっぱら装丁構造との対応関係に重きを置いて解釈されており、それらが同時に書籍の使用機能や閲覧経験を表す語としても用いられていた可能性については、十分に吟味されているとは言い難い。

方俊琦は、「旋風装」を複数の装丁形態を内包する過渡的な古籍形制として捉え、その歴史的展開の過程において、旋風卷子（巻軸を基底とする形態）、旋風葉（書葉が散頁あるいは半固定の状態にある形態）、および旋風冊子（すなわち折本／経折装）といった異なる形態が併存していた可能性を指摘していて興味深い（方 2009, p.51）。同研究は、旋風卷子、旋風葉、旋風冊子がそれぞれ社会的流通、ならびに政治的な目的で用いられた文書の呈進といった異なる使用環境および機能的要請に対応して形成されたことを明らかにし、装丁形式の変化が単なる形式的推移ではなく、使用状況の変化に応答する過程であったことを明らかにしている（前掲論文, p.52）。このような視点は、「装丁」を「いかに使用され、いかなる環境に置かれていたのか」という歴史的文脈の中に位置づけ直すものであり、本研究が構造および造形理念の観点から議論を展開する際、必要となる枠組みを与えてくれている。

一方で、折本（経折装）を「旋風装」の概念の下に全面的に包摂することは、折本（経折装）が有してきた宗教的・制度的背景や文化的認識における相対的な独立性を弱めるおそれがある。装丁形式における機能的あるいは構造的な連続性が、直ちに装丁名称の概念的統合を意味するとは限らず、仮に機能的類似性のみを根拠として命名を統合するならば、「旋風装」という概念は過度に拡張され、分析概念としての精度を損なう可能性がある。したがって、旋風装と折本（経折装）との関係については、両者の形態的連関を認めつつも、具体的事例に即して、その構造的特質および造形理念をより精緻に検討する必要があると考えられる。

2.3 まとめ

以上の先行研究を総合すると、歴史的装丁形式に関する既存の研究成果は、形式上の分類や

歴史的考証の面で豊かな蓄積を示している。とりわけ、李根蔓(2024)は、折本(経折装)を文化的・美学的観点から捉えており、佐々木(2016)や堀川(2010)も、書誌学的観点から装丁形式の整理を行っている。これらの研究はいずれも、装丁形式の歴史的展開や構造的特質を理解する上で重要な基礎を提供している。その一方で、これらの研究の多くは、装丁形式の分類や機能的特徴の整理に重点を置く傾向が強く、個々の装丁形式に即した構造分析と造形理念を統合的に考察する視点は、なお十分に深化しているとはいえない。

また、旋風装および折本(経折装)についての専門研究に関しては、高田(2003)、杜(1997)、方(2009)らにより、形態的連関や歴史的変遷が論じられている。しかしながら、両者の構造的特質および造形理念を比較し、それぞれの形式が異なる文化的文脈の中でどのように受容され、変容したのかを具体的資料に基づいて検討した研究となると、現段階では限定的である。

以上の点を踏まえ、本研究では、これまでの先行研究を補うアプローチとして、旋風装および折本(経折装)に関する具体的な古籍資料を対象としつつ、その構造的特徴の分析を拠り所としながら、そこからさらに一步踏み込んで、それぞれの造形理念および文化的背景との関係にも目を向け、両形式がいかなる要因のもとで形態的変容を遂げたのかを明らかにする。

3. 歴史的装丁形式の展開と折本(経折装)・旋風装の形成

すでに述べたように、唐から宋にかけての時代、中国の歴史的装丁は巻物形式から冊子形式に至る転換期を迎えた。そして、そこでの革新にあたっては、隋唐時代における製紙術の改良が重要な役割を果たしたことが示唆されている(劉 2006, p.79)。この時期は日本の平安時代とほぼ重なっており、遣唐使を通じて多くの典籍や製本技術が日本に請来された。

平安時代に先立つ飛鳥時代(593年-694年)から奈良時代(710年-794年)にかけての時代

は、唐代の政治制度や文化が体系的に受容され展開する。この時期の文化は「唐風文化」と称されている。続く平安時代は、唐風文化を基盤としながら、次第に日本の特色をもつ「国風文化」および「院政期文化」が展開する。このことから、両国の装丁様式における異同を明らかにするためには、とりわけ平安時代における日本および同時期の中国の代表的な装丁形式を明確にし、その発展の過程における変容のあり方を考察することが重要になってくる。

3.1 日本における装丁形式の起源と展開

平安時代末の12世紀から鎌倉時代の13世紀頃にかけて、日本では唐風文化の受容を基盤としつつ(陳 2017, p.52)、和紙の発達、仮名文字の普及、文学・宗教活動の展開などを背景に、書物の構造と形式に関してもさまざまな変化がみられる。

奈良時代から平安初期にかけての主流は卷子装であった。これは、紙を横方向に貼り継ぎ、末端を軸に糊付けして巻き取る構造を持つ装丁である。それ自体としては中国の帛書⁽¹¹⁾や仏典装丁に由来し、仏教経典・儒書・法典・文学作品などがこの形式で日本にもたらされたことがその普及の背景にある。『論語総略⁽¹²⁾』や『注千字文⁽¹³⁾』、『金光明最勝王経⁽¹⁴⁾』といった書物がその例として挙げられる。

日本においては、この装丁形式が「権威的な書物の形」として受容され、卷子という形態そのものに「神秘性」や「権威性」が見出された(堀川 2010, p.28)。このような特性から、卷子装は公式文書や儀礼文書の装丁として長期にわたり用いられ続けたと考えられる。

たとえば、平安時代から室町時代にかけて作成された東寺関係文書⁽¹⁵⁾には、卷子装による文書が多数含まれており、宗教的・公的文書における卷子装使用に関する具体的な現存資料となっている。卷子は、開巻の際、巻頭を両手で整えながら慎重に広げ、左右の手で巻きを均等に送り出して目的の箇所へ進むという段階的な動作が必要となる。欧陽麗が述べるように、歴史的書籍における翻閱行為は、人と書物との相互作用を伴う動態的過程として理解することが

でき（欧 2010, p.85）、卷子装においても、こうした閲覧行為そのものが一定の儀礼性を形成していた可能性がある。すぐに目的の箇所を開けないという不便さはあったものの、その点がかえって「秘伝性」や「荘厳性」を生み、権威の象徴として機能したと考えられる。

そうした中、卷子装を一定幅で折り畳み、前後の表紙を一枚紙で接続するという旋風装（旋風葉）が新たに出現した（高田 2003, p.112）。この形式は、卷子装の連続性を保ちながらも、展開可能であり、閲覧性と保存性を兼ね備えた装丁形式であった。

折本（経折装）においては、卷子装に伴う翻読や携帯の不便さがより一層改善された。また、古くは卷子装で製作された写経のなかにも、折本形式の刷経が一般化する時期になると折本へ改装されるものが現れた（佐々木 2006, p.12）。それゆえ、中国同様、日本においても折本形式の書物が広く受容されるようになった。このような折本形式の受容には、携帯性や閲覧性といった実用的利点のみならず、当時の社会的背景や宗教儀礼、さらには読書文化の変容も深く関係していたと考えられる。また、こうした受容の拡大は、折本そのものの形態や使用材料、装丁構造の変化にも影響を及ぼした可能性があると考えられる。

続いて、新たな装丁形式として粘葉装が成立する。粘葉装は、縦に二つ折りした紙を同じ向きに重ね、折目の内側を糊付けして貼り継ぐ方法である⁽¹⁶⁾。この構造によって、旋風装（旋風葉）や折本に生じやすかった紙葉の摩耗や破損の問題は、一定程度軽減されたとみられる。これは、折本のように紙葉を繰り返し折り畳む必要がなく、折目部分への負荷が比較的少なかったためである。国文学研究者の神作研一によれば、日本に現存する最古の粘葉装本は、空海が唐から持ち帰った『三十帖策子』（大同元年 806 年）であり⁽¹⁷⁾（神作 2017, p.11）、現在は仁和寺に所蔵されている⁽¹⁸⁾。この形式は、折目の内側を糊付けして貼り継ぐ構造をとるため、製作において作業が比較的容易であり、装丁も簡便で、冊子の分量調整もしやすい形式であったと考えられる。しかし、粘葉装は糊を多

用する構造であるため、虫害に弱いという欠点も挙げられている（堀川 2010, p.30）。これに対して、大和綴（やまととじ）は、糊の使用を比較的抑え、糸によって綴じる形式であるため、虫害の原因となる糊の使用をある程度避けることができたと考えられる。また、糸が切れた場合にも交換が可能であったことから、構造上、維持・補修の面において一定の利点を有していた可能性がある。

大和綴（やまととじ）は、右側の背近くに四つの穴を開け、二つずつを組にして表で平結びを行い、糸端を意図的に余らせて装飾とする点に特色がある（山中 2013, p.4）。それは、和風文化の成熟を象徴する装丁形式である。単に技術的改良にとどまらず、紙の「右綴じ」「見開きの左右均衡」「縦構成の美意識」といった日本特有の造形理念が体现されている（王 2021, p.9）。平安中期にはすでに用いられていたと推定され、『紫式部日記』などの記述からもその存在が窺える⁽¹⁹⁾（陳 2017, p.52）。もっとも、「大和綴」という呼称は歴史的に指示内容が一定しておらず、列帖装（綴葉装）を指す場合もあれば、結び綴じ形式を指す場合もある（井上 1999, p.582）。したがって、本稿では両者を区別して用いる。

一方、列帖装（れっしょうそう / 綴葉装）は、数枚の料紙を重ねて二つ折りとした帖を複数列ね、折り目に綴じ穴を設けて糸で綴じ合わせる装訂形式であり、綴じ糸の結び目を内側に収める点に特色がある。平安時代の元永本『古今和歌集』、鎌倉初期の藤原定家筆『更級日記』もこの装丁で、江戸期に至るまで多く行われた。（井上 1999, p.609）平安後期から鎌倉初期にかけて、列帖装（綴葉装）は和歌・物語・随筆などの文芸作品に多用され、書物が単なる知識媒体から美的対象へと変化する契機となった。こうした点を踏まえると、装飾的な綴糸は書物における美術的表現の一部として機能していたと理解できる。

以上のように、日本における装丁形式は、各時代の用途や文化的要請に応じて変化し、多様な形式が併存するようになった。こうした歴史的展開は、次節以降で折本や旋風装がどのよう

に受容・変形されるかを考察するうえで、重要な前提となる。

3.2 中国における装丁形式の起源と展開

中国における書籍の歴史は三千年以上に及ぶ。最初の正式な書籍は簡冊であり、殷商時代の後期（紀元前13世紀頃）に登場した。その後、絹帛、巻物装、経折装、蝶装、包背装、線装など、さまざまな装丁形式が発展してきた。こうした書籍の装丁形式は、材料や環境、利便性の影響を受けて絶えず変化してきた。最初は竹を材料とした簡冊から始まり、その後、絹帛や紙の使用にともなって、装丁形式は巻物へと発展したとされる（錢 2004, p.35）。さらに、元興元年（105年）に蔡倫によって製紙技術が確立されて⁽²⁰⁾以来、紙の普及と印刷技術の発展に伴い、巻物から冊子形式へと進化した。印刷技術の進歩により、書籍の装丁は何度も変化を重ね、次第に完成度を高めていった。本稿では、書物構造の変化という観点から、中国における代表的な装訂形式を、簡冊・巻物・冊子形式という三つの発展段階に整理したうえで概観する。

3.2.1 簡冊

簡は、亀甲を元に作られた中国最古の書籍形式で、漢字を亀甲や竹片に記録したものである（錢 2004, p.10）。その後、竹片を糸で連ねて「簡冊⁽²¹⁾」と呼ばれる形式が生まれた。この方法は、書籍の性質に適しており、後世の装丁に大きな影響を及ぼしたとみられる。

3.2.2 巻物形式

後漢の蔡倫による製紙技術の確立以降、紙の使用は次第に普及した。絹や紙の普及に伴い、それらは書写材料として次第に竹簡に取って代わるようになった（楊・蔣 2013, p.45）。簡は絹帛や紙の物性に適応しきれなくなり、これに対応するかたちで、柔軟で収納しやすい特徴を持つ卷子形式が発展していったと考えられる。さらに、東晋末年（4世紀末－5世紀初）になると、「廢簡，用紙」の政策が実施され、紙は軽量性や低廉性といった特性を背景に、他の材

料に代わる主要な書写材料として定着していった。こうした巻物形式には、卷子を基盤とする装丁形式として、卷子装および旋風装（龍鱗装）が含まれる。

唐代（7世紀末－8世紀中葉）になると、仏教文化の隆盛により仏教經典の需要が急増した（李 2024, p.64）。しかし、卷子装は内容の増加に伴って全体が長大化し、展開や翻読の操作に一定の制約を伴う形式であった。このような構造的特性を背景として、旋風装（龍鱗装）が生まれた。

3.2.3 冊子形式

冊子形式には、折本（経折装）、蝶装、包背装、線装などが含まれ、いずれも方形の冊本を基本とする形態である。

木版印刷の発明（8世紀頃）は書籍生産の効率化をもたらし、書物の普及を大きく促進した（邱 1984, p.47）。一方、唐代中期以降（8世紀中葉以降）になると、旋風装（龍鱗装）よりも携帯・閲覧・保存に適した折本（経折装）が広まる。晩唐（9世紀前半－中葉）になると、折本（経折装）は改良されて、さらに読みやすく、保存しやすい蝶装が誕生した。蝶装は構造が複雑で製作が難しかったため、元代には文字面を外側にして糸で結びつける包背装が生まれた。線装は包背装の技術を発展させたもので、封面や封底に紙を追加することで装飾性と耐久性を高めた。これらの形式は、中国歴史的装丁文化の発展を象徴するものである。

以上を踏まえ、代表的な装丁形式について整理を行った（図3）。

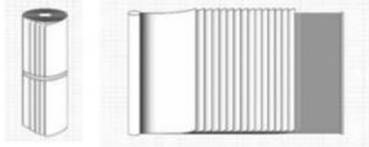
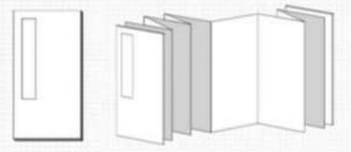
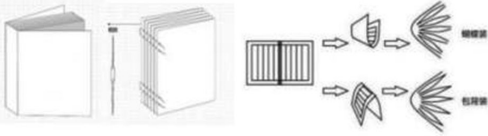
	時期	プロフィール	図例
卷子本	東晋から	紙や絹を糊で継ぎ合わせ、一方向に巻いた書物形式である。巻物（マキモノ）、巻本（マキホン）、手巻（シュカン）とも称される。閲覧時には、巻物を端から開き、連続的に書かれた内容を読み進める。	
旋風装	中唐から	旋風装は、長尺の用紙を基底とし、その上に書葉を一枚ずつ段階的かつずらして貼り重ねた装丁形式である。「旋風装」という名称は、その形態の特徴と密接に関係しており、薄く仕立てられた書葉が軸線に沿って可動する構造を備える点に特色がある。この構造により、書葉は容易にめくことができ、翻検性に優れるとともに、風に吹かれると回転するように動く様子が名称の由来となっている。	
折本	唐中から	折本は経折装とも称され、長尺の紙を山折りと谷折りを交互に繰り返して折り畳み、巻首および巻末に厚紙を加えて表紙・裏表紙を構成する装丁形式である。この構造により、卷子装に比して携帯性や閲覧性が向上している。	
蝶装	晚唐五代	蝶装は対裱装とも称され、木版印刷が広く普及した宋・元代に盛行した装丁形式である。文字を刷った紙葉を内側に向けて二つ折りにし、折り目を揃えて糊で貼り合わせて書芯を構成し、最後に表紙を貼り付けて完成させる。この形式は木版印刷の版面構成に適合し、裁断工程に要する人手と時間を省くとともに、装訂の堅牢性を高める点に特徴がある。	
包背装	元から	包背装は蝶装に近い装丁形式であるが、折り方はこれと逆である。本文の版心を外側に向けて二つ折りにし、折り口を小口として紙葉を二枚ずつ貼り合わせる点に特徴がある。綴じ口には紙縫りを通して仮綴じを行い、その後、一枚の書衣を用いて背から表紙・裏表紙にかけて包み貼りし、最後に全体の裁断を施して完成させる。	
線装	明	線装は包背装から発展した装丁形式で、長期にわたり用いられ、近代書籍装丁に大きな影響を及ぼした。紙葉を整えて穿孔し、紙縫りに代えて糸で綴じるとともに、表紙・裏表紙をそれぞれ独立させ、針法によって書芯と一体化させる点に特徴がある。	

図3 中国歴史的装丁の特徴
作成筆者（2025）

このように、中国における装丁形式は、簡冊から巻物、さらに折本・蝶装・包背装・線装へと連続的に展開し、素材・印刷技術・需要の変化を背景に、多様な冊子体が成立していった。この変遷の中で、巻物から冊子形式への転換を象徴する代表的な装丁として位置づけられるのが、本研究で取り上げる旋風装と折本（経折装）なのである。

3.3 旋風装と折本（経折装）の形成と分析

以上の比較整理を踏まえ、旋風装と折本（経

折装）を主要な分析対象とし、その形成と歴史的展開を視野に入れつつその構造的変化について考察する。

3.3.1 旋風装の形成と分析

旋風装の形成背景には、唐代の文芸文化の興隆がある。詩歌や韻書が盛行し、膨大な語彙や典故を正確に参照する必要が生じた。しかし、詩文や経書の内容が増えた場合、それらをすべて巻物形式で仕立てようとすると、書巻全体の長さが著しく増大することになる。加えて、巻

物は制作過程において紙葉の両端に軸を付し、さらに絹や布などを用いて装裱・補強されることが多いため、展開や翻読が煩雑になるだけでなく、携帯や保管の面でも不便であった。このような使用上の制約に対応するかたちで、長篇テキストの閲覧や携帯を可能にする装丁形式として旋風装が生まれた。旋風装は、内頁を規則的に並べた形式で、読む際に最後まで巻き戻す必要がなく、利便性が著しく向上した。

現存する実物資料としては、唐代の王仁昉による『刊謬補缺切韻』（706年 故宮博物院蔵）（図4）であり、これは旋風装（龍鱗装）の典型構造を示す貴重な資料である。

日本における旋風装（旋風葉）は、折本の前後の表紙を一枚の紙または布で貼り合わせ、全体を包み込むようにした構造を持ち、他の部分は折りたたんだまま、背から独立している。そのため、風に煽られて頁が翻る様子からこの名が付いたといわれる⁽²³⁾（図5）。

ちなみに、日本でこの旋風装（旋風葉）という用語が初めて用いられたのは、かなり後の1903年（明治36年）のことであるという。漢学者で書誌学者でもあった島田翰は『漢籍善本

考』において次のように述べている。「卷子の制は一事を探すごとに展開するのが煩雑であるため、後世において卷子を折り畳んで冊子とした。その形、旋風のごとし」⁽²⁴⁾。ここから、旋風装（旋風葉）が卷子装と折本の性質を併せ持つ中間的形態として理解されていたことが分かる。旋風装（旋風葉）は、一枚の紙葉を単位として折り畳む形式をとり、前後の表紙部分のみを相互に貼り合わせ、中間の書葉は固定されていないという構造的特徴を有している。構造原理の観点から見ると、日本の旋風装（旋風葉）は折り畳みと展開を基本とし、書葉が連続的に展開され、かつ反復的に折り畳まれる可逆性を重視する構造を備えており、明確な「折り畳み式ページ」を示している。これに対して、中国における蝶装および包背装（図3）は、すでに冊子形式の体系に属し、頁背を糊付けすることによって書葉全体を固定することを基本原理とするため、その構造は、旋風装（旋風葉）とは構造原理が異なる。

以上の点を踏まえると、日本の旋風装（旋風葉）を「卷子装一折本（経折装）」という形式的系譜の中に位置づけて理解することは、構造



図4 『刊謬補缺切韻』
故宮博物院公式サイト⁽²²⁾ (2008)

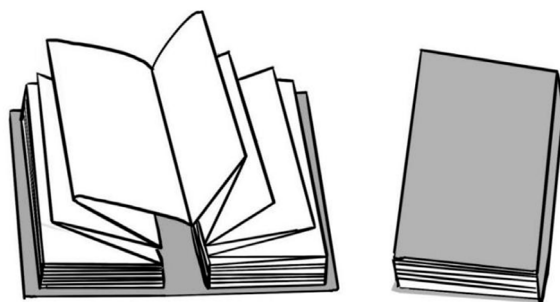


図5 日本における旋風装の形態図
作成筆者 (2025)

特性、および造形理念のいずれの側面においても、より妥当であるといえる。すなわち、日本の旋風装(旋風葉)は、唐宋期における「葉子⁽²⁵⁾」概念や卷子装から冊子装への転換期のコンセプトを吸収し、和紙の柔軟性と折畳文化に基づいて再構成された造形的形式であることが理解される。

いずれにしても、旋風装は、物理的には巻物と冊子の中間に位置し、造形的には「連続」と「分節」を同時に表す構造であり、書物の構造美を理解する上で欠かせない存在である。日本の旋風装(旋風葉)は、唐代の原型を直接継承したものではなく、素材特性や折本文化を背景として形成された、独自の素材感覚と造形意識を反映した発展形式であるが、それでもなお、旋風装という形式は日中両国における「冊子化への移行」を象徴する重要な装丁様式として位置づけられる。

3.3.2 折本(経折装)の形成と分析

折本(経折装)の起源は、東晋(4世紀)以前の折畳式写本にまで遡ることができる。しかしながら、清代(17世紀)以前の文献には「経折装」という語は見られず、「疊紙」「折子」「折本」「手折子」「梵夾」など多様な呼称が用いられていた(方 2023, p.33)。唐宋時代の詩文にもその存在を示す記述があり、たとえば宋代の羅璧(1244年-1309年)による書「識遺」には「古人書不多而精審, 作冊亦不解線縫, 只疊紙成卷(古人は書物が多くはなく, その制作も精緻であった。冊子を作るにあたっても線で綴じることはせず, ただ紙を折り重ねて巻物とした。)」とある。これらはいずれも、折畳構造の初期的形態を反映している。さらに、敦煌遺書に残る多数の仏教写経にも折畳式の断簡として確認されており、折畳式の実用性と宗教性を裏付けるものとなっている(張 1953, p.69)。

このような折畳構造は、卷子装の連続性を保持しながら、携帯性や閲覧性を高める点に特色があったとみられる。すなわち、巻軸を用いず一定幅で折り畳むことにより、開閉や収納の利便性が向上し、後の折本形式へと展開していったと考えられる。

日本ではこの形式を「折本」と称している。用紙を糊で貼り継ぎ、文字を書写したのち、一定の幅で折り畳んで収納する構造を持ち、その原理は卷子本と同一でありながら、巻軸を折り込むことで開閉の煩わしさを解消したものである。実際、13世紀以降、折本の増加と刷経の普及が指摘されている(佐々木 2016, p.12)。折本の増加が刷経の普及と結びついているのは、折本が卷子装に比べて携帯性・閲覧性に優れ、仏教經典の誦読や流通に適した形式であったためである。それは、折本の用途として仏教經典や書道手本が挙げられていることから明らかである(堀川 2010, p.28)。さらに、平安時代に入ると、『法華経』や『金光明最勝王経』などの写本が次々と制作されていたことが、現存資料によって確認される⁽²⁶⁾。

以上の検討から、折本(経折装)は、卷子装の構造的連続性を継承しつつ、折畳によって閲覧性・携帯性・収納性を高めた装丁形式であったといえる。なお、宗教的实践や流通の拡大にも対応しうる形式として、日本において広く受容されたことが考えられる。一方、旋風装と折本はいずれも卷子装から冊子化へ向かう過渡的形式として位置づけられるが、その構造原理や使用場面にはそれぞれ異なる特徴が認められる。以上を踏まえ、次章では、そうした折本と旋風装の具体的事例として『刊謬補缺切韻』および『法華経』諸本を取り上げ、その構造的特徴、使用機能、および造形的特質について立ち入って検討する。

4. 旋風装と折本(経折装)の分析:『刊謬補缺切韻』と『法華経』を中心に

4.1 旋風装の分析:『刊謬補缺切韻』を中心に

すでに上記の先行研究の分析においても触れた通り、旋風装については、中国においては『刊謬補缺切韻』や敦煌遺書中の遺品が現存している一方で、日本においては実物資料が確認されておらず、主として文献記述や間接資料に基づいて理解されている。また、代表的資料である遺品とされる『刊謬補缺切韻』についても、書誌学的記述の中で一定の特質把握はなさ

れているものの、実物資料に基づく詳細な検討には及んでいない。

そこで、旋風装について理解すべく、本章では、現存する貴重な実例である北京故宮博物院所蔵の唐写本『刊謬補缺切韻』に目を向ける。本書は、唐代音韻学（言葉の音に関する研究）の重要典籍であると同時に、その独特な旋風装形式によって、唐宋期における書籍制度の変遷と装丁設計思想の革新を示す資料である。

『刊謬補缺切韻』は、一連の単葉を一定の順序で台紙に貼り合わせることにより、外観は巻物のようでありながら、内部は一葉ずつ繰り閲覧できる装丁形式をもっている。その構造上の特徴は以下の通りである。

まず、両面書写が確認される。初葉を除き、各葉は両面に書写され、貼り付け位置をずらす「錯縫裱法（さくほうひょうほう）」によって順次台紙に貼り重ねられている。このような構造的特徴は、実用性を最優先とした装丁意識をも反映している（王 2004, p.52）。本書は文人が日常的に参照する音楽の参考書であり、その装丁形式のねらいは、各頁を全面的に開示できるだけでなく、外側にわずかに残る縁に見出しや標識を書き入れることも可能であり、そのこと

によって検索を容易にし、さらに携帯性の向上をはかることにあった。錯縫裱法により、読者は展開状態のまま二頁を同時に閲覧でき、巻軸の開閉を繰り返す手間を省くことができた。ここに「巻物の形」と「冊子の便」を兼ね備えた構造的融合が見られる。

王淮珠による『刊謬補缺切韻』についての詳細な分析からも、初葉に施される特別な処理を読み取ることができる。すなわち、初葉は片面のみに書写され、次葉の「頭縫（とうほう）⁽²⁷⁾」部分に直接接続される構造をとる（王 2004, pp.122-136）。この部分は視覚的にも構造的にも書物の始まりを明確に示し、巻軸装における「引首（いんしゅ）」の機能を保持しつつ、初葉と次葉を並置することで冊子体の「並視・連読」構造を先駆的に実現している。以下の図6において、王の説明に基づき（王 2004, p.129）、旋風装の内部構造を図示している。この「初葉によって全体を定める」という考え方は、近代書籍デザインにおける「表紙－扉頁－本文」という構成論理とも理念的に高い親和性がある。すなわち、書物の冒頭部分によって読者の視線や読書導線を方向づけ、全体の印象を形成するという点において、両者には共通した構成意識

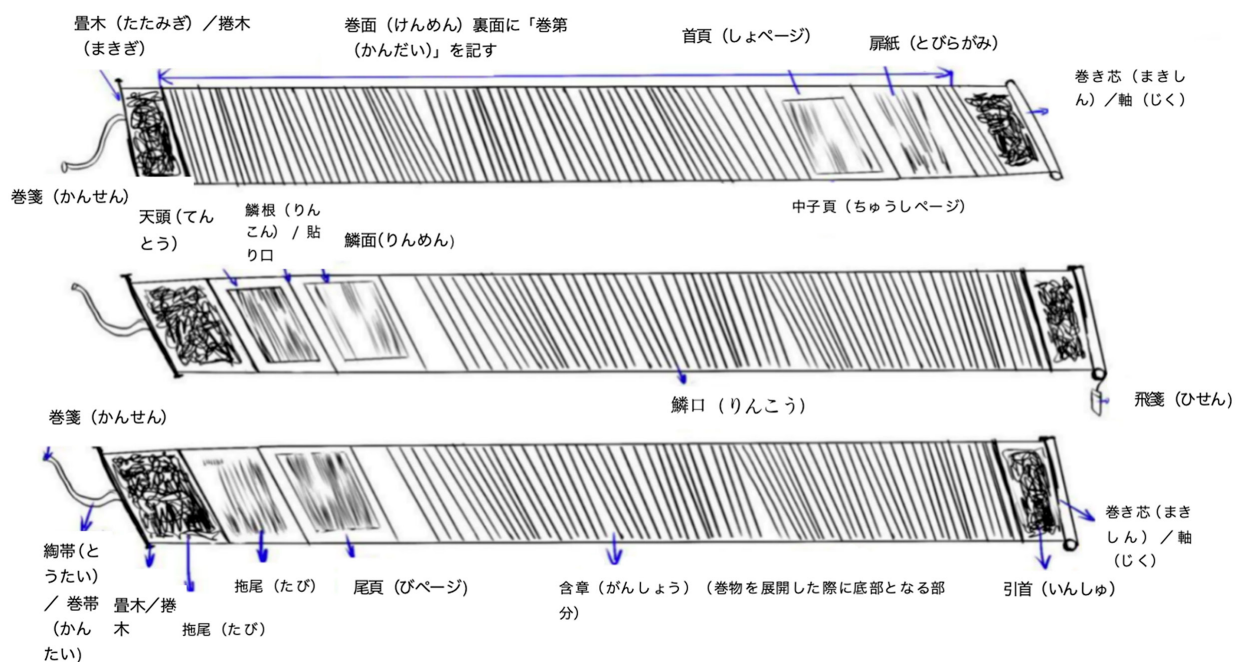


図6 旋風装の構造模式図
作成筆者（2022）

が認められる。

この、『刊謄補缺切韻』においては、さらに開閉方向の改善の可能性が模索されていたとも考えられる。従来の巻物が右から左へ展開するのに対し、『刊謄補缺切韻』の旋風装は左から右へ全体を展開した後、右から左へと順に頁を繰って閲覧する方式を採る。巻収方向もこれに合わせて右から左へと改められ、葉口との干渉を避けるように構造が認められる。このような構造は、使用機能を重視する中で、装丁形式が段階的に改変されていった結果として理解することができる。

4.2 折本（経折装）の分析：『法華経』を中心に

『法華経』は、漢伝仏教において最も影響力の大きい経典の一つであったとされる。そして、その装丁形式は巻軸装を経て経折装へと体系的に変化してきたことが示されている（王 2004, p.135）。

折本（経折装）が主として仏典を中心に発展したことを踏まえると、広く流布し、多様な書写形式を示す『法華経』は、折本（経折装）を考察する上で典型的な資料であるといえる。

『法華経』は書写・供養の功德を繰り返し説く内容を持つことから、日本においても、平安・鎌倉期に頻繁に書写された経典の一つであり、それゆえ日中の折本（経折装）を比較考察するにあたって最も適切な資料として位置づけられる。この中でも、平安時代から伝わる『法華経』第五提婆達多品第十二（11世紀）においては、すでに紙面に残る折痕や損傷の痕跡から、巻軸装から折本への移行を示唆する形態的特徴が確認されている⁽²⁸⁾。最終的には巻軸装に戻されたと考えられるが、その前段階に見られる二部の形態的变化は、経折装成立の過程を理解する上できわめて示唆的である。

以上の理由から、本研究では折本（経折装）の代表的事例として『法華経』を取り上げ、日中双方におけるその装丁の変容と文化的意義を検討する。日本に現存する平安・鎌倉期の経折装資料は必ずしも多くはないが、関連する装飾経巻や折本資料を参照することで、多角的に検討することは可能である。

4.2.1 装丁形式と構造の分析

『法華経』の経折装の外観の特徴を立ち入っ

表1「中国国家珍貴古籍名録」に収録されている宋代『法華経』の装丁数量統計

題名	版の時代	版の詳細（版本）	高（cm）	長（cm）	一紙長（cm）	装丁形式	所蔵地	収蔵機関
1 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋開宝4年（971）刻・大觀2年（1108）印開宝	32.4	445	47.8	経折装	山西省	高平市文庫館
2 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋写・金粟山広慧禅院大藏經本		924	60.5	胡蝶装	北京市	中国国家図書館
3 妙法蓮華経七卷	五代宋	五代末宋初刻本	27	762.6	49.8-52.2	経折装	山西省	高平市文庫館
4 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋慶曆4年（1044）写本	30.5			卷子本	山東省	即墨市博物館
5 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋慶曆4年（1044）写本	30.5			経折装	山東省	滕州市博物館
6 妙法蓮華経七卷	宋	宋刊本	24.3			胡蝶装	江蘇省	南京図書館
7 妙法蓮華経七卷	北宋	宋・元符2年（1099）写本	37	421	48.5	経折装	山西省	曲沃県図書館
8 妙法蓮華経七卷	宋	宋抄本	28	820	56	経折装	山西省	曲沃県図書館
9 妙法蓮華経七卷	南宋	宋写本	31		16	経折装	江蘇省	常熟博物館
10 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋開宝元年（973）金銀字写本	16.8			胡蝶装	上海市	上海図書館
11 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋刊本	30.3		11.3	経折装	浙江省	浙江省博物館
12 妙法蓮華経七卷	北宋	五代宋初刻本	22.7		10.4	経折装	山東省	山東博物館
13 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋初年刻本	21.8		10	梵夾装	山東省	山東博物館
14 妙法蓮華経七卷	北宋	宋・臨安府賈官人經書舖刻本	21.8		10.5	梵夾装	山東省	山東博物館
15 妙法蓮華経七卷	南宋	宋刊本	19.6		8.6	経折装	上海市	上海図書館
16 妙法蓮華経七卷	北宋	宋刊本	24.5		11.1	経折装	北京市	中国国家図書館
17 妙法蓮華経七卷	北宋	南宋紹興24年（1154）裴得純抄本	22.8		10.4	経折装	山東省	山東博物館
18 妙法蓮華経七卷	宋	宋刊本	22.8	135		卷子本	浙江省	温州博物館
19 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋崇寧刻本	22.6	824.5		経折装	浙江省	温州博物館
20 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋・大中祥符8年（1015）釈雲素写本	28	349		卷子本	浙江省	温州博物館
21 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋・嘉祐5年（1060）杭州錢家刻本	29.5	990		経折装	浙江省	上海図書館
22 妙法蓮華経七卷	五代宋	北宋・嘉祐5年（1060）杭州錢家刻本	32.7		24.8	経折装	浙江省	温州博物館
23 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋・熙寧2年（1069）刻本	27.3	675		卷子本	北京市	録管室
24 妙法蓮華経七卷	宋	宋刊本	16.6-16.8		85	胡蝶装	江蘇省	蘇州博物館
25 妙法蓮華経七卷	南宋	南宋・景定2年（1261）安吉州婦安陸道源刻本	18.8			経折装	北京市	中国国家図書館
26 妙法蓮華経七卷	南宋	北宋・熙寧元年（1068）杭州晏家刻本	25.2		17.5	梵夾装	北京市	中国国家図書館
27 妙法蓮華経七卷	宋	宋・泥金写本	16.8		8.7	胡蝶装	北京市	中国国家図書館
28 妙法蓮華経七卷	北宋	北宋写本	25.2		11.3	梵夾装	北京市	中国国家図書館
29 妙法蓮華経七卷	宋	宋刊本	23.8		10	経折装	北京市	中国国家図書館

「中国国家珍貴古籍名録」のデータより筆者作成（2025）。

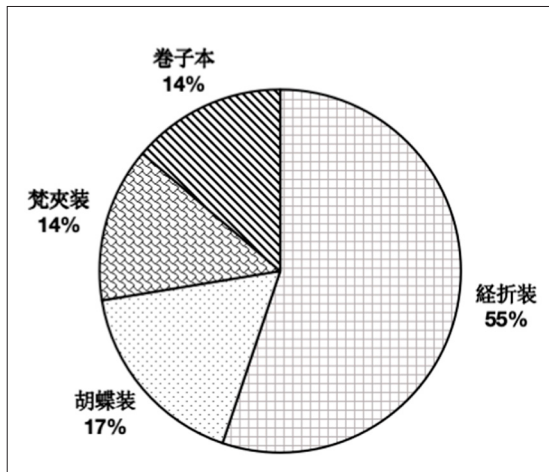


図7 「中国国家珍貴古籍名録」に収録されている宋代『法華經』の装丁占比統計
「中国国家珍貴古籍名録」のデータより筆者作成（2025）。

て分析するために、中国国家珍貴古籍名録に登録されている唐・宋時代の『法華經』を対象に統計をとった。その結果、確認された資料は計29件であり、このうち経折装は16件（すべて宋代に集中）を占め、全体の約55%に相当する（表1・図7）。

宋代に確認された16件の折本（経折装）資料について、高さのデータをもとに統計分析を行い、折本（経折装）の高さ分布図を作成した。経折装の長さは内容量によって大きく異なるため、分析対象は主として高さに限定した。

統計結果によると、宋代の折本（経折装）の高さは主に26～32cmの範囲に分布しており、

この範囲内の資料は全体の約50%（8点）を占め、比較的一般的な標準寸法を形成している。そのうち、22～25cmの範囲は約25%、32～37cmの範囲は約19%、18～20cmの範囲は約12%を占めている（図8）。

全体的に見ると、宋代の経折装は中型（26～32cm）の寸法を多く採用しており、この傾向から、当時における経折装の一定の規格化が徐々に進行していたことが推察される。

このような寸法上の規格化傾向は、隋唐期の写經制度と宋代の印刷技術の双方から影響を受けて形成されたと考えられる。こうした動きは、雕版印刷の発達や經典の大量刊行による普及と密接に関わっていた。一方で、枠内で一定の変化が生じた点については、陰と許が述べるように、北宋熙寧元年（1068年）以降に実施された「官による民間刻書規制緩和政策」とも深く関わっていた（陰・許 1991, p.218）。民間における刻經活動の隆盛は印刷版の急増をもたらした。その結果、經書の寸法や版式は地域や刻印工房の差異によって多様な様相を示すようになった（楊・蔣 2013, p.73）。そのため、経折装の寸法は必ずしも厳格な統一基準を形成していたわけではないが、柔軟に対応できる余地を残されていたといえる。このことは、基準となる寸法や行数の枠組みがあらかじめ共有されており、その上で用途や制作条件に応じた調整が行われていたことを示している。寸法や行数・行間などの物理的パラメータの相対的な統一

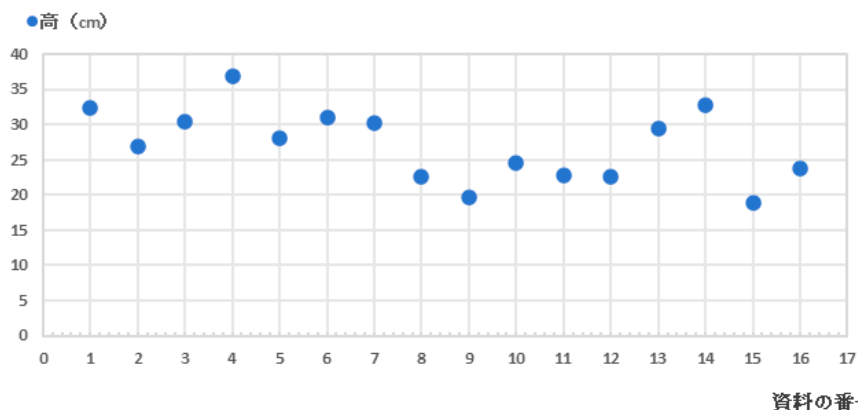


図8 「中国国家珍貴古籍名録」に収録されている宋代『法華經』の折本の高さ分析
（各番号に対応する作品名は表1を参照）
「中国国家珍貴古籍名録」のデータより筆者作成（2025）。

表 2 平安・鎌倉時代における部分折本の数量統計

	題名	版の時代	高 (cm)	長 (cm)	一紙長 (cm)
1	春日版五部大乘經 〈伊予国光明寺伝来〉	鎌倉時代後期	28.5		9
2	法華經卷第三藥草喻品第五	奈良時代	26.2	378	
3	妙法蓮華經 卷第五 提婆達多品第十二	平安時代	21.8	955.4	
4	紙本墨書細字法華經八卷	平安時代	23.3		8.8
5	法華經序品 〈竹生島經〉	11世紀 (平安時代)			
6	新修浄土往生伝卷下	平安時代	28.4		16
7	悉曇藏 卷第八	平安時代	27.8	2821.2	18.7
8	元丹生大明神社 大般若波羅蜜多經	平安後期-室町	24.2		19.9
9	悉曇藏 卷第六	平安時代	27.9	1666.4	18.7
10	悉曇藏 卷第三	鎌倉時代	27.7	1489	18.4
11	悉曇藏 卷第七	平安時代	27.8	2315.1	18.7
12	悉曇藏 卷第五	鎌倉時代	27.7	1708.4	18.5
13	悉曇藏 卷第二	平安時代	27.7	1331.6	18.5
14	悉曇藏 卷第一	平安時代	27.7	1521.9	18.5
15	四十番歌合 〈建保五年十月十九日 / 〉	鎌倉時代			
16	春記 〈永承三年 / 〉	鎌倉～室町			

「文化遺産オンライン」、和泉市久保惣記念美術館、吉川史料館(岩国市)の公開資料に基づき筆者作成 (2025)。

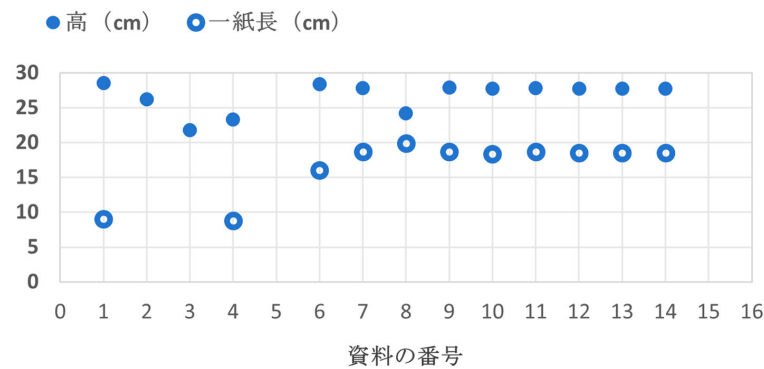


図 9 平安・鎌倉時代における部分折本の高さ統計

(各番号に対応する作品名は表 2 を参照)

「文化遺産オンライン」、和泉市久保惣記念美術館、吉川史料館 (岩国市) の公開資料に基づき筆者作成 (2025)。

は、印刷技術と書籍制度の結合を反映しており、宋以降における経折装の成熟化を象徴している。

一方で、日本に現存する平安・鎌倉期の経折装については、公開資料データベース「文化遺産オンライン」や、和泉市久保惣記念美術館、吉川史料館 (岩国市) などの公開機関における

所蔵データから、保存状態が良好で情報が比較的充実している参考性の高い古籍 15 例を収集して分析をおこなった。その内訳は、『法華經』が 2 例、『悉曇藏』が 8 件、その他が 5 件である (表 2)。

上記の統計結果から、折本の高さは 27 ～ 29cm に集中しており、全体の約 63% (10 件

中6件)を占めていることが明らかになった。そのうち、20～25cmの中型規格が約25%、30cm以上の大型書籍は約12%にとどまる。同時に、「単紙の長さ(1葉の長さ)」は18～19cm区間に集中し、16cm以下の短い規格も一定数確認された(図9)。

以上の結果から、日本の折本は全体として縦長で比例の安定した構造を示し、宋代の経折装に比べてより細身の形態を呈していることが明らかになった。さらに、中国の古籍と比較すると、日本の折本は寸法比率や紙葉の構成方法において調整が加えられている。

4.2.2 材料と技法の分析

調査の結果、金銀写本が3例、朱墨による刻本が1例確認された。これらの材料はいずれも高価であり、制作には長い時間と高度な技術を要したと考えられる。たとえば、『法華経』巻第五提婆達多品第十二には銀縁が施され、花鳥文様が描かれている。その花鳥は本来、銀の輝きを放ちながら経巻全体に清浄無垢な印象を与えるものであったと推察される。

蘇州博物館に所蔵される『法華経』は碧紙(磁青紙)に泥金で書写されたものである。この碧紙金書は唐から五代にかけて特有の形式であり、その書体には唐代小楷の温雅で端正な風格がよく表れている。包首には泥金による牡丹文⁽²⁹⁾が描かれ、周囲には幾何文様の縁取りが施されている(図10)。

金銀写本は、金・銀粉を墨とし、磁青紙を台紙として制作されたものであり、その色彩対比

は強く、視覚的にも荘厳で厳粛な印象を与える。唐代の学者・高僧である釈道世(生年未詳-683)は『法苑珠林』において、次のように述べる。「震旦国之一人書大毗尼藏及修多羅藏及修多羅經、銀紙金書、毗尼律金紙銀書⁽³⁰⁾(中国である人物が、大乘戒律の蔵および經典集を写経し、そのうち經典は銀色の紙に金字で、戒律は金色の紙に銀字で書写されていた)」。そこから、すでに唐代において金銀写経の伝統が存在していたことが分かる。磁青紙を用い、金粉に膠を混ぜた墨で経文を記すことで、青地に金字が映える華麗な効果を生み出し、書物の神聖性と美的価値を同時に表現しているのである。

一方、朱墨刻本は赤と黒の二色を用いて摺り合わせる、機能性と芸術性を兼ね備えた革新的な印刷技法である。近代中国の書誌学者葉德輝は『書林清話』(1911)において、朱印本が古代において尊貴なものとして扱われていたことに言及している(葉1911, p.30)。朱砂は当時きわめて高価な顔料であり、その調製や摺り合わせの工程も複雑であったため、朱墨本の制作数は必然的に限られていた。こうした希少性ゆえに、朱墨本は一般の写本に比べて特に高く評価されたと考えられる。さらに、日本では独自の素材として雲紙が用いられた⁽³¹⁾。雲紙とは藍または紫に染めた繊維を一度漉いた紙の上下に雲状に重ね漉きするものであり、上下両面に青色の飛沫が散るような効果が見られる。紙面に漂う雲形の文様は天地調和を象徴的に表しているといえる。

折本制作には、菩提葉・血液・金銀銅鏤など特異な素材や技法を用いた例も見られる。戴孚によって整理・再編された古籍『冥報記』には、写経に際して極めて厳格な儀礼的手順が踏まれていたことが記されている(戴1992, p.7)。このような記述は、折本(経折装)においては、書写・装丁・翻読といった一連の行為が、単なる制作や閲覧にとどまらず、功德を積むための信仰実践として理解されていたことを示している。また、紙質や寸法、装丁形式に対する配慮は、經典を宗教的に荘厳する行為としての意味を可視化する役割を果たしていたと考えられる。



図10 唐五代『法華経』
(蘇州博物館) 撮影筆者(2024)

5. 装丁構造と文化的受容の考察

5.1 旋風装の文化受容の考察

すでに述べた通り、旋風装は、巻物形式から冊子形式への移行過程における過渡的形式の典型例である。この形式は、歴史的装丁が巻軸形式から閲覧や操作に適した形式へと発展していく過程を具体的に示している。それは、「巻物」から「冊子」への転換を促した重要な技術的試みとして位置付けられる装丁形式であり、後世の折本（経折装）や蝶装などの冊子形式の成立に思想的・実践的基盤を提供することになるものである。

その中でも、上記にみた故宮博物院所蔵の『刊謬補缺切韻』は、その独特な構造によって、装丁技術の発展史を物語る貴重な実物資料であると同時に、素材・機能・伝統の三要素の間に調和を見出そうとした古代工匠の創意を体現している。

旋風装の意義は、何よりも書物を「連続的に巻いて読む」形式から「分葉的に繰って読む」形式へと転換させた点にある。その可動的な構造によって、古代の書物は初めて「視読」と「検索」という二重の機能を備えるに至ったのである。旋風装が採用された『刊謬補缺切韻』にみられるように、詩文の参照や格律の確認を目的とする字書類が、当時の知識体系を支える基幹的な参考書として高い権威を有していたという点も看過できない。旋風状に重ねられた分葉構造は、単なる物理的な綴じ方ではなく、語彙の階層性や条目の秩序を視覚的に表す効果を持っていたと考えられる。したがってこの装丁は、語彙の分類・整理を重視した当時の知識文化を反映しているだけでなく、精巧な制作と複雑な構造を備える点において、華麗な造形を尊ぶ時代の美的傾向とも深く関わっていたと考えられる。つまり、このような装丁形式の出現は、文化的環境および読書様式の変化をも如実に反映していたのである。この旋風装は、やがて形式の再構築と機能の分化を経て、折本（経折装）や冊子形式へと発展していくことになる。

5.2 折本（経折装）の文化受容の考察

折本（経折装）は、仏典の読誦・携帯・保存といった実践的需要に応じて発達した形式であり、その折り畳み形式は、読誦の際の取り扱いやすさや、展開時の視認性を向上させた点に特徴がある。展開すれば一連の文字を俯瞰でき、折り合わせれば携行しやすい形態に収まるため、巻軸装とは異なる装丁形式を可能にしたと考えられる。

唐宋期の折本（経折装）は、単なる物理的な改良にとどまらず、經典に内在する「天地人」や「此岸—彼岸」といった宇宙観的秩序を造形化した形式でもあったという（霍・段・許 2023, p.148）。すなわち、折畳構造そのものが「反復と循環⁽³²⁾」を体現し、仏教儀礼における読誦・開合・供養の動作と密接に連動していたのである。

また、折本が平面に展開できることから、文字や装飾が視覚的に把握しやすく、とくに日本の平安・鎌倉期には、経頁上に金銀泥による書写や蓮華・人物・瑞雲などの装飾が施された例もみられる。こうした事例は、折本が単なる読誦具ではなく、使用者によって視覚的鑑賞性を備えた書物としても用いられていたことを示唆している。鎌倉時代の『法華経』絵巻折本では、折本形式と絵画表現が組み合わせられ、展開時には絵巻のように連続して鑑賞でき、折り合わせれば經典として収納できるという二重の機能がみられる。以上を踏まえると、折本（経折装）の場合も単なる構造的改良による形式ではなく、經典の利用環境や視覚的な受容のあり方に即して発展した装丁形式であったといえるであろう。

5.3 日中の比較と文化的受容

5.3.1 唐宋と平安前期：巻物装丁から経折装への文化伝来段階

奈良時代末から平安時代初期にかけて、日本は複数回にわたり遣唐使を派遣するなど、日中間の交流が活発であった。王祉璠は、この時期の書籍形態についても巻物装丁（卷子本）が多く用いられていたことを指摘している（王 2021, p.10）。巻物装（卷子本・巻物）は、仏典

・絵画・文学典籍などの記録に用いられ、その形式は唐代の巻物とほぼ同一であった。特に絵画を伴うものは「絵巻物」と呼ばれ、巻物を広げるにつれ絵と文が展開していく絵巻物は、平安時代末頃から見られ、鎌倉時代に多く作られた⁽³³⁾。文章と挿絵が交互に現れる『源氏物語絵巻』はその代表例である。読書時には右から左へと展開し、文字と図像が連続的に構成されることで、時間と空間の流れを視覚的に表現していた。

中国の折本（経折装）は、主に仏典の書写・読誦に用いられ、携帯や保存に適した形式として発展した。これに対し、日本において早くから採用されていた折本（経折装）形式の用途は、写経、書写手本、また書道教育用資料など、多岐のジャンルに及んでいたことが示されている（堀川 2010, p.28）。この点から、日本の装丁形式は、唐宋の装丁的構造を受け継ぎながらも、その機能面においては宗教的用途にとどまらず、教育的・審美的側面へと展開していったと理解されうる。

5.3.2 宋代と平安中期以降：印刷普及による技術吸収と改造の段階

北宋期に入ると、中国では木版印刷の普及により書籍装丁の体系化と標準化が進むことになる（孫 2024, p.26）。特に蜀地方では木版印刷が発達し、単葉を貼り合わせて綴じる蝶装（ちょうそう）が盛んとなる。蝶装は、頁を開くと左右に蝶の羽のように広がる構造を持ち、精巧である一方、制作にはやや難がある。とはいえ、この形式は、宋代における印刷文化の成熟と、書物の機能性重視の傾向を象徴している。

一方、平安中期の日本では印刷技術の普及は限定的であり、典籍は手書き写本が主流であった。日本の粘葉装（でっちょうそう）は「綴じた後に書写する」という方法をとる（陳 2017, p.52）。その構造は、唐末から五代にかけて成立した冊子形式の影響を受けたものであり、その結果、中国の粘葉装や蝶装と粘着方法において類似した装丁的特徴を示している。しかしながら、両国における社会的発展段階の相違により、製書の時期や用紙、書体などにおいて日本

的特質を備えた独自の装丁様式が形成されたと考えられる。粘葉装は両面書写が可能で、「版心（はんしん）⁽³⁴⁾」の統一を必要とせず、軽便で柔軟な構造を持つため、文人による手書きの作品に適していた。糊付けの技法は共通するものの、接着位置が異なり、蝶装は折り目の内側に、粘葉装は外側に貼り合わせる点に特徴があった（橋口 2011, p.35）。宋代ではさらに包背装が登場する。これは、紙縫（こより）による綴じと一枚紙の表紙により整然とした外観を有していた。一方、日本では平安中期に縫綴じ装丁である列帖装（綴葉装）が生まれ、列帖装（綴葉装）は糸や組紐を用い、柔軟な和紙を表紙に採用し、装飾性の高い結び目を施すことが多かった。その軽やかで優美な造形は、日本において宋代装丁が受容される際に、機能性よりもむしろ「美感」と「形式の趣」が重視されたことを示している。

6. 結論と今後の課題

以上のように本研究は、唐宋期の中国および平安・鎌倉期の日本における歴史的装丁形式の変遷を視野に入れつつ、巻物形式から冊子形式へと移行する過渡的段階において成立したと考えられている旋風装と折本（経折装）を取り上げ、その分析を試みた。その際、以下の差異に留意した。まず、中国においては『刊謬補缺切韻』や敦煌遺書中の遺品を通じて旋風装の実物構造を確認することができるのに対し、日本においては、旋風装に該当する実物資料は確認されておらず、その理解は主として後世の文献記述や間接資料に基づいて形成されてきた。そのため、日本における「旋風装」という名称は、中国の旋風装（龍鱗装）を直接継承した装丁形式を示すものというよりも、「旋風」という語から想起される書葉の展開性や動き、ならびに折本にみられる連続的な閲覧性に着目して、折本状態の書物を説明・分類する過程で選択された用語であると考えられる。したがって、中日両地域において「旋風装」あるいは「旋風装」という類似した名称が用いられているものの、両者は必ずしも同一の装丁形式を指すものでは

なく、その構造的特徴や歴史的背景には相違が認められるということである。そのことを踏まえた上での分析結果として、旋風装（旋風葉）は、実物資料の伝承ではなく、折本の展開性や連続的な閲覧性を説明するために用いられた名称として用いられる。一方、中国における旋風装（龍鱗装）は、当時の語彙分類を重視する知識文化の背景を反映しているのみならず、精巧で華麗かつ複雑な造形を尊ぶ審美的傾向をも示していることが明らかになった。折本（経折装）は、仏典の読誦・携帯・供養といった宗教的行為に適応する形で折り畳み構造が発達した装丁形式として位置づけられるが、中国においては仏教経典の大量生産と印刷制度の発展とともに、寸法規格の標準化が進行し、冊子体としての完成度が段階的に高められていったのに対し、日本では、実測データおよび事例分析に示されるように、縦方向に細長い比例構成、料紙を用いた装飾表現の洗練化といった独自の造形的特徴が形成されていたことが確認された。その上で、本研究で扱った事例の検討を通じて、書物における「形」と「意」は、常に有機

的に結びつき、物質性と精神性の融合として装丁の特徴を形づくってきたことも確認できた。ただし、これらの特徴は、主として現存資料に基づく観察結果であり、保存・継承の過程における資料選択の偏りが影響している可能性については、留意する必要がある。

今後、その課題も含めて、こうした歴史的装丁形式の構造分析および視覚的効果に関する研究の一層の深化が求められる。特に、「間」「余白」「律動」「対称と非対称」といった視覚構成の原理を手がかりに、唐宋および平安期における書籍の版面構成・色面配置・装飾などの造形理念についても再検討される必要があるだろう。これにより、装丁形態が機能的要素にとどまらず、芸術性と精神性を併せ持つ造形言語としての価値を持つものであることが再認識されるであろう。そして、こうした総合的な分析を通じて、現代のデザインや芸術表現における歴史的装丁形式の新たな可能性を模索するための理論的基盤と分析の視座を提示することもできるに違いない。

〔注〕

- (1)「敦煌遺書(とんこういしょ)」とは、1900年に敦煌の莫高窟・藏経洞で発見された古代の写本および印本の総称であり、その数はおおよそ5万から6万巻に及ぶ。おおむね4世紀から11世紀にかけての貴重な歴史資料である（方俊琦 2013, p.30）。
- (2)「列帖装(れっしょうそう)／綴葉装」は、数枚の料紙を重ねて二つ折りにし、複数の折帖を表紙とともに糸で綴じた冊子形式である。各帖を列ねる構造をもつことから列帖装と呼ばれ、平安時代以降、日本で広く用いられた。一方、「大和綴(やまととじ)」は、列帖装を装飾化したもので、背近くに穴を開けて糸で平結びし、組紐などを用いた美しい装飾本が多く、日本独自のものと考えられ、平安末期から近現代に至るまで行われた。（井上 1999, p.609,582）
- (3)本稿での日本語以外の引用、記述などは、

特に出所を明記していない場合はすべて筆者の訳である。

- (4)「刊謬補缺切韻(かんびゅうほけつせついん)」は、隋の仁寿元年(601年)に顔之推・陸法言らによって編纂された『切韻』をもとに、唐中期の王仁煦がさらに整理・増補を加えて完成させた韻書である。当時の漢字音を体系的に整理した重要な辞典であり、独特な旋風装（龍鱗装）による装丁をもつ点で注目される。なお、この内容については第4章で具体的に述べる。
- (5)『法華経』という表記は、『妙法蓮華経』の略称として広く用いられている。漢訳過程においては、梵語原題に含まれる「白(sukla)」が省略された『正法華経』『妙法蓮華経』などの名称が成立し、さらに「妙」「蓮」を省いた略称として『法華経』が用いられるようになったとされる（定広 2010, p.2）。

- (6)「旋風装(別称・龍鱗装/旋風葉装)」は、頁を展開すると風に翻るように見えることからこの名が付けられた。外形は長巻状だが、内頁は規則的に配置され、各頁の縁には要点を記すことも可能であった。(鄭 1987, pp.34-37)。
- (7)「折本(おりほん)」は、卷子本のこうした煩雑さの解消をはかるために考案された装訂で、卷子本を端から一定の幅で折り畳んでいき、前後に表紙を付けたものである。(井上 1999, p.90)。
- (8)「折本/経折装(けいせつそう)」は、紙を横方向に貼り継ぎ、一定の幅で山折り・谷折りを繰り返して蛇腹状に折り畳む構造をもつ(鄭 1987, pp.43-45)。
- (9)「粘葉装」は、折り目の内側を糊で貼り合わせる方法で、平安期の仏典に多く見られる。(堀川 2010, p.30)。
- (10)「蝶装」は、両面に印刷または書写された単葉を背合わせに糊付けし、開くと蝶の羽のように左右に広がる構造をもつ(鄭 1987, pp.34-37, 43-45)。
- (11)「帛書(はくしょ)」: 帛(絹布)に文字を書写した書物の総称。製紙術が普及する以前の中国で用いられ、柔軟で巻き取りが容易であったため、卷子装の成立に影響を与えたと考えられる(楊・蔣 2013, pp.43-44)。
- (12)『論語総略』は、鎌倉時代後期から南北朝期にかけて制作された卷子装写本であり、現在は曼殊院門跡所蔵、京都国立博物館寄託として伝えられている重要文化財である。(高田 2013, p.57)。
- (13)『注千字文』には、鎌倉時代(弘安10年・1287年)に書写された紙本墨書・卷子装の一巻本が現存しており、国宝・重要文化財として伝存している。<https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/156058> (2025年11月30日閲覧)
- (14)紫紙金字写経『金光明最勝王経』(全10巻)は、奈良時代(8世紀)に制作された卷子装仏典であり、国宝・重要文化財として伝存している。[https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100246](https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100246&content_pict_id=0&utm_source=chatgpt.com) (2025年11月29日閲覧)
- (15)東寺関係文書とは、東寺(教王護国寺)の寺務運営、宗教儀礼、土地・荘園経営などに関わって作成された文書群を指す。本論で言及する東寺関係文書は、九州国立博物館に所蔵される資料群に基づく。九州国立博物館『九州国立博物館収蔵文化財目録』(PDF)
https://www.kyuhaku.jp/museum/images/090729/h20_bunkazai.pdf (最終閲覧日: 2025年12月1日)
- (16)大阪府立中之島図書館「古書の形態」
<https://www.library.pref.osaka.jp/site/osaka/kosho-keitai.html> (2025年9月15日閲覧)。
- (17)国文学研究資料館「日本古典籍の基礎知識『はじめての古典籍』」
<https://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/images/H26-kotenseki01.pdf> (2025年10月7日閲覧)
- (18)真言宗御室派総本山仁和寺「文化財(書跡)」
https://ninnaji.jp/about_culturalassets/calligraphy/ (2025年10月7日閲覧)
- (19)『紫式部日記』に見られる冊子制作に関する記述は、「書写後に綴じる」という工程として理解することが可能である。もっとも、列帖装(綴葉装)の場合、紙葉の連続性と頁構成の連続性が一致しないため、一般にはあらかじめ冊子状に綴じた後に書写が行われたと考えられている。そのため、同記述は、むしろ大和綴による冊子制作を示している可能性がある。ただし、古い時代の大和綴の現存遺品は極めて少なく、その実際の使用状況については、なお不明な点が多い。
- (20)前漢期(紀元前2世紀頃)の「灋橋紙」(1957年出土)などの資料も確認されている。また、『説文解字』には篆体の「紙」字が収録されており、「紙、絮一苦也」と説明されている。これは、初期の「紙」が絹繊維に近い素材であったことを示すもの

とされる(杭 2007, p.175)。これに対して、一般に「蔡倫の製紙術」と称されるものは、樹皮などの植物繊維を利用した製紙技術を体系化・改良した点に特徴があり(杭 2007, p.175)、書写材料としての利便性と普及性を大きく高めた点に重要な意義があると考えられる。

- (21) ここでいう簡冊は、細長い竹簡を縄で綴り合わせ、最終的に巻き取って巻軸状としたものであり(楊永徳・蔣潔 2013, p.36)、後世において中日両国で流行した方形冊子体の「簡冊」とは形態的に異なる。
- (22) 出典：故宮博物院公式サイト
<https://www.dpm.org.cn/ancient/special/143123.html> (2023 年 6 月 18 日閲覧)
- (23) 立正大学図書館「和本の形態—和本の構造と各部名称解説」の記述による。https://www.ris.ac.jp/library/learn/cb6q790000001h66-att/wahon_keitai.pdf (2025 年 10 月 2 日閲覧)
- (24) 本内容は、杜偉生『中国古籍修復与装裱技術図解』(北京図書館出版社、2003 年) p.346 の記述を参照したものである。
- (25) 「葉子」とは、中国唐宋期に広く用いられた単葉形式の書物であり、折り畳んだ長方形の形状が樹木の葉に似ていることから、「葉子」あるいは「葉」と称されたとされる。(陰・許 1991, pp.207-208)
- (26) 本記述は、須藤弘敏「一章 再論・写経と莊嚴——東アジアにおける日本写経莊嚴の特質——」(p3) に示された内容を参照したものである。東北大学機関リポジトリ(TOUR) 掲載 PDF, <https://tohoku.repo.nii.ac.jp/records/130613> (2025 年 11 月 17 日閲覧)。また『法華経』および『金光明最勝王経』の写本データについては「東向観音寺史料目録(一)」『日本史学研究室紀要 第 9 号』に掲載された記載による。
- (27) 「頭縫(とうほう)」とは、帖の冒頭で初葉と次葉を結び合わせるために施される最初の綴じ部分を指す(王 2004, p.122)。
- (28) 文化遺産オンラインの解説によれば、紙面

の折り目や損傷の程度から、その形態が卷子装から折本装、さらに再び卷子装へと変遷した可能性がうかがえる。最終的には卷子装に戻されたものの、前二作の存在だけでも十分に典型的な事例としての意義を持っている。<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/213447> (2025 年 9 月 29 日閲覧)

- (29) 牡丹文とは、牡丹の花を図案化して表現した装飾文様を指す。これらの文様は、絵画・彫刻・刺繍・陶磁器など多様な芸術形式に用いられてきた。牡丹文は、中国伝統文化における重要な装飾要素の一つであり、その華麗な外観と特徴的な造形性から、唐代以降、広く用いられてきたとされる(黄・呉 2024, p.25)。また、中国の工芸・装飾文化においては、富貴や華麗さを象徴する意匠として理解されている。
- (30) 本文記述は、釈道世『法苑珠林』(1990, p.220) に基づくものである。
- (31) 藍または紫に染めた繊維を、一度漉いた紙の上下に雲状に漉きかける。上下ともに青色の飛沫が散るような効果が見られる。細かな雲模様が散らされた紙は「飛雲」と呼ばれ、平安時代特有の装飾である(堀川貴司 2010, p.122)。
- (32) 「重複」と「循環」については、ここでは次のように捉えたい。まず、重複は、読者が一枚の頁を読む際に繰り返す「開く／閉じる」という動作に最も端的に現れる。一方、循環は読書行為全体に潜在しており、経折装に固有の「一正一反」という連続した頁構造が、読者の身体動作を前のサイクルへと緩やかに戻す方向へ導いていく。このような構造面と動作面の双方に働く「重複」と「循環」によって、経折装は読書に反復・往復・循環的なリズムを内包する可能性を備えていると考えられる。
- (33) 本記述は、国立国会図書館「絵入り本の様ざま — 絵巻物」に掲載された記載を参照したものである。<https://www.ndl.go.jp/exhibit60/copy3/1emakimono.html> (2025 年 11 月 17 日閲覧)

(34)「版心(はんしん)」とは、中縫い・版口とも称され、書頁を折り畳む際の中心となる部分を指す。版心には、書名・巻数・頁数・刻工名などが記されることが多く、製本上の基準として機能する(銭存訓 2004, p.38)。

参考文献一覧

日本語文献

- 井上宗雄・岡雅彦・尾崎康・片桐洋一・鈴木淳・中野三敏・長谷川強・松野陽一編(1999)『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店
- 遠藤律子・宮崎紀郎(2007)「明治時代の書物の装幀：印刷および諸技術の発展との関わりから見た装幀の変遷」『デザイン学研究』2007(5): 69-78
- 大貫伸樹(2005)『製本探索』印刷学会出版部
- 檜村雅章(2021)「貴重書について」『尚美学園大学芸術情報研究』34: 33-44
- 神作研一(2017)「日本古典籍の基礎知識『はじめての古典籍』」『日本古典籍講習会テキスト』15:5-30
- 佐々木孝浩(2016)『日本古典書誌学論』笠間書院
- 高田時雄(2003)「敦煌韻書の発見とその意義」『草創期の敦煌學』知泉書館
- 高田時雄(2018)「旋風装は日本に行われたか？」『中国典籍日本古写本の研究』1: 1-3
- 高田宗平(2013)「曼殊院門跡所蔵『論語総略』影印・翻印」『国立歴史民俗博物館研究報告』175(1): 55-60
- 中尾堯(2000)「京都立本寺の法華經写経」『立正大学文学部研究紀要』16: 1-27
- 長沼光彦(2016)「昭和初期の書物装丁を支えた美意識—円本・限定本・商業美術—」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』46: 67-78
- 橋口侯之介(2011)『和本入門』平凡社
- 藤井隆(1991)『日本古典書誌学総説』和泉書院
- 堀川貴司(2010)『書誌学入門—古典を見る・知る・読む—』勉誠社
- 本明子・下川智之(2011)「伝統工芸技術を継承した新しい工芸品の開発」『日本デザイ

ン学会研究発表大会概要集』58(0): 186

柳宗悦(2006)『民藝とは何か』講談社

山中康行(2013)「和本の名称—粘葉装・列帖装・綴葉装・大和綴—装訂工程からの考察」『京都女子大学図書館情報学研究紀要』1: 1-13

中国語文献

- 暴希明(2015)「中国古代書籍の形態演進」『殷都學刊』2015(03): 119-124
- 曹之(1992)『中国古籍版本学』武汉大学出版社
- 陈彦妮(2017)「日本平安時代の書籍装幀及其与唐代書籍装幀的关系」『大连大学学报』38(05): 51-54
- 陈路(2019)「中国古籍装幀艺术的传承与发展路径探析」『出版广角』2019(4): 65-67。
- 霍春梅・段伟・许强(2023)「中国古籍装幀的形制与美学探究」『辽宁工程技术大学学报(社会科学版)』25(2): 144-149
- 定广(2010)『法华经四要品解读』上海辞书出版社 2010: 1-23
- 戴孚撰(1992)『冥报记』中华书局
- 杜伟生(2003)「从敦煌遗书的装幀谈“旋风装”」『中国古籍修复与装裱技术图解』北京图书馆出版社 p335-348
- 方俊琦(2013)「从敦煌遗书看古籍形态的演变与发展」『浙江师范大学学报』2013(06): 30-35
- 方俊琦(2009)「古籍“旋风装”演变探微」『浙江师范大学学报(社会科学版)』2009(04): 49-53
- 杭间(2007)『中国工艺美术史』北京人民美术出版社 p175
- 黄秋霞・吳紅芝「牡丹花裝飾紋樣的藝術形式與審美價值研究」『東方設計學報』2024(03): 25-31
- 李根蔓(2024)「从“装幀”到“设计”—论中国古代書籍装幀中的传统美学思想及现代意义」『出版发行研究』2024(4): 64-69
- 李致忠(2009)『中国书史研究』商务印书馆
- 李致忠(2018)「中国古代書籍的装幀形式与形制」『文献』2008(3): 3-17
- 李致忠(2024)「『永乐大典』失传散逸考」『古

- 籍保护研究』2024(12):5-30
- 李珂(2023)「经折装写本装帧修复研究与实践——以『五月五日午时书四海龙王进宝味』为例」山东艺术学院硕士论文
- 吕若玲(2018)「古书装帧之『旋风装』钩沉」『荆楚学术』2018(11)
- 吕若玲(2020)「古籍装帧中的旋风装钩沉」『荆楚学术』2020(4):47-49
- 刘国钧・郑如斯(1995)『中国书的故事』中国青年出版社
- 刘建忠(2006)「试述古代书籍装帧形式的演变与特点」『古今书话』2006(4):78-80
- 欧阳丽(2010)「关于中国古代书籍翻阅中观赏形态的思考」『艺术与设计』2010(3):84-86
- 钱存训(2004)『中国纸和印刷文化史』广西师范大学出版社
- 邱陵(1984)『书籍装帧艺术简史』黑龙江人民出版社
- 孙從添(清)(1772)「蔵書紀要・装丁」(『续修四库全书总目提要』子部芸術類所収)上海古籍出版社(2016):527-530
- 孙珮书(2024)「中国传统装帧形制的结构重构探究」北京印刷学院硕士论文
- 宋応星(1637)『天工開物』姚建编著 内蒙古文化出版社(2023):328-388
- 宋东晗(2018)「『旋风装』的装帧形式」『东西南北』2018(12):174-175
- 王淮珠(2004)『精、平装工艺及材料』印刷工业出版社
- 王祉璠(2021)「浅析中日韩书籍装帧设计中的『传承与创新』——以吕敬人、杉浦康平和安尚秀为例」青岛科技大学硕士论文
- 闫梦真(2023)「旋风装帧形式在插画设计中的应用研究——以『异兽』插画设计为例」山东工艺美术学院硕士论文
- 阴法鲁・许树安(1991)『中国古代文化史』北京大学出版社:207-238
- 杨永德・蒋洁(2013)『中国书籍装帧400年艺术史』中国青年出版社
- 叶德辉(1911)『书林清话』李庆西标校 复旦大学出版社2008
- 张静庐(1953)『中国近代出版史料・初编』上

杂出版社

- 张慧(2024)「佛经经折装的形成及其意义」『河南图书馆学刊』2024(6):135-137
- 钟志云(2007)「关于蔡伦及其造纸术的若干问题探讨」华南师范大学硕士论文
- 郑如斯(1987)『中国书史』书目文献出版社
- 周嘉胄(1697)『装潢志』(『昭代叢書』卷六所収)中華書局影印版(1977)
- 朱倩・杨昊泽(2017)「浅谈传统书籍装订与现代装帧的融合」『西部皮革』2017(10)50.

インターネットからの情報

- designing(2023)『『工芸』『民藝』と『デザイン』はいかにして交わるのか。“小さなこと”から始まる社会変革——哲学者・鞍田崇×Local Wisdom Hub・田房夏波』
designing. <https://designing.jp/anybydesigning2-report>, (2025年8月29日閲覧)
- 国立文化財機構「法華経方便品(竹生島経)」
https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100163&content_picture_id=0, (2025年7月25日閲覧)
- 中国知網(CNKI:中国科学院文献情報センターが運営する学術データベース) <https://kns.cnki.net/kvisual8/article/center?language=CHS&uniplatform=NZKPT> (2025年10月1日閲覧)
- 文化遺産オンライン「妙法蓮華経 卷第五 提婆達多品第十二」<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/relatedsearch>, (2025年5月25日閲覧)
- 国指定文化財等データベース. <https://kunishitei.bunka.go.jp/>, (2025年8月24日閲覧)
- 岩国市文化財公式サイト「紙本塙書細字法華経 八巻 付 仁和寺任助法親王」<https://iwakuni-bunkazai.jp/> (2025年7月25日閲覧)
- 国立国会図書館「絵入り本の様ざま ― 絵巻物」
<https://www.ndl.go.jp/exhibit60/copy3/1emakimono.html> (2025年11月17日閲覧)

国文学研究資料館「古典籍等の書誌調査法—装訂・料紙・書風などの基礎知識—」

<https://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/images/H26-kotenseki01.pdf>
(2025年10月7日閲覧)

デジタルミュージアム「法華経巻第一方便品第二」 <https://www.ikm-art.jp/digitalmuseum/num/001/0011546000.html>
(2025年1月3日閲覧)

文化庁文化財オンライン「注千字文」 <https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/156058> (2025年11月30日閲覧)

故宮博物院公式サイト <https://www.dpm.org.cn/ancient/special/143123.html> (2023年6月18日閲覧)

奈良国立博物館「紫紙金字写経 金光明最勝王経（全十巻）」 https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100246 (2025

年11月29日閲覧)

文献・古籍デジタルライブラリー「国家図書館古籍善本データベース」国家図書館古籍善本データベース. <http://gjml.nlc.cn/#/>,
(2025年9月20日閲覧)

立正大学図書館「和本の形態—和本の構造と各部名称解説」 https://www.ris.ac.jp/library/learn/cb6q790000001h66-att/wahon_keitai.pdf (2025年10月2日閲覧)

九州国立博物館『九州国立博物館収蔵文化財目録』(PDF)
https://www.kyuhaku.jp/museum/images/090729/h20_bunkazai.pdf (2025年12月1日閲覧)

大阪府立中之島図書館 (2014)「古書の形態」
<https://www.library.pref.osaka.jp/site/osaka/kosho-keitai.html> (2025年9月15日閲覧)

A Study on the Historical Transformation of Structural Forms and Cultural Reception in Chinese and Japanese Bookbinding

— Focusing on the Bookbinding Forms of the Tang
—Song and Heian–Kamakura Periods—

Yan Mengzhen

University of East Asia, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Department of Design
Email: yanmengzhen842@gmail.com

Abstract

The Tang–Song period in China and the Heian–Kamakura period in Japan were both transitional phases in bookbinding history, marked by active cultural exchange. In China, book formats shifted from scrolls to codex-like structures, producing forms such as *jingzhe zhuang* (accordion fold), *xuanfeng zhuang* (dragon-scale binding), and *die zhuang*. In Japan, imported formats became the basis for developing related structures, leading to distinctive types such as paste-down binding, Thread-leaf binding, and Yamato-toji. However, most previous studies have examined these formats within single national contexts, and cross-regional comparisons that address both structural principles and cultural symbolism remain limited.

This study adopts a cross-regional perspective by focusing on *xuanfeng zhuang* and accordion-fold formats as representative examples. By analyzing their morphology, transmission, and development, it proposes a theoretical framework that identifies shared structural principles and culturally specific aesthetic elements, aiming to open new possibilities for traditional bookbinding and contemporary artistic practice.

Key words: *Xuanfeng zhuang*, Accordion-fold binding, Traditional bookbinding,
Tang–Song period, Heian–Kamakura period, Cultural reception,
Sino-Japanese comparative studies